

特別企画研修会「被災地における終末期支援」

『被災地の復元ボランティアから見たもの～そして今』

の講演のあとの休憩では、おおげさではなく本当に立ち上がることができませんでした。この思いをどのように表現したらいいのか、今まで何度も考えてみましたが、どうにも見つけられません。

震災後、復元ボランティアのきっかけとなった、3歳の身元不明の女の子の遺体とご縁があったからこそ今日まで走ってこれたと、笹原先生は話されていました。

『記憶のトラウマを、生前生き生きとしていた時の思い出に変えたい』

まさに究極のグリーフケアです。たった1時間30分という限られたエンゼルケアの時間の中で、ご遺族の感情の変化を引き出していこうとするならば、非常に緻密で高度なテクニックをもってケアにあたられているのだらうと思います。それは先生の復元納棺師としての素晴らしい技術と優れたコミュニケーション、ご遺族の関係性をすばやく察知する力があるからこそ成し得るものではないでしょうか。

最初に、目良会長から「魂とたましいをつなぐお仕事をされている」と講師紹介されていました。まさにその通りだと思いました。そして『つなぐ』という意味では、私たち作業療法士も、あらゆる『作業』を通じて人と人をつなぐ役割があるのだと思います。職種が違って、終末期支援という同じ目的を持つ笹原先生から学ぶことは沢山ありました。そして、仙台の地で聴くことにも大きな意味がありました。

エンゼルケアメイクの実技も含めて、心から『聴いて良かった』と思えた時間でした。

ベーシックコース「終末期におけるコミュニケーション」

「グリーフケアで一番大切なことは、まず自分自身を見つめようじゃないか」という笹原先生のお話はうなずけることばかりでした。確かに自分のことがわからなければ、相手が大切に思っていることへ思いを馳せることはできないのかもしれませんが。それは自分の死生観を考えていくことにもつながるのでしょう。

笹原先生は、ご遺族がプロに求めることとして①技術②理解してくれるのではないかと希望、と話されていました。私は、これはOTに求められることとしても通ずるものがあると思いました。

傾聴という言葉は、簡単なようで実践は難しいものです。けれど笹原先生は、具体的にお話ししてくださいました。そして、ご遺族に対しての関わり方も教えて下さいました。悲しみを言語化してもらうことは大切なことだそうです。私はいまだに祖母が亡くなったことについて、感情を言語化できていない自分に気がつきました。

二日間で沢山勉強させていただきました。そしてこの二日間で感じた事を風化させないためにも、8月に出版されとうかがった絵本をぜひ手元に置きたいと思いました。

有難うございました。